

第4回次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会 議事録

1 あいさつ

(田邊水政室長)

昨年の7月から始まったこの検討会も4回目を迎え、今回、計画の案を示すことができた。皆様に改めて感謝申し上げます。

皆様の意見を踏まえながら、案をまとめたが、これまで3回に渡っていただいた皆様の意見については、素案という形でとりまとめ、昨年末の神奈川県議会で報告した。

県議会では質疑も行われ、最終的には「長年に渡る地道な取組みにより、水源地域と都市地域の住民の交流や、水源地域の理解促進が図られてきたことは、一定の評価をするところである。計画の改定に向けては、水源地域の自然やそこに暮らす人々の生活が守られてこそ、良質な水源が確保されることを念頭に、地域住民や関係団体、市町村の意見をしっかりと聞き、地域の方々が一緒に取り組みを進めようと思える計画になるよう作業を進めていただくことを求める」という意見をもらっている。

その後、素案をもって県民意見募集（パブリックコメント）を実施した。またその間、検討委員会の委員の皆様には、個別に意見をいただいた。

本日は、これまでの検討会での意見やその後の庁内での議論、パブコメの意見などを踏まえて、とりまとめた案を用意した。

今後は、本日の検討会での議論をもとに、早急に案を最終形にして、今月15日から始まる県議会に案として報告した上で、3月中に策定する予定で進める。

限られた時間の中ではあるが、委員の皆様には活発な議論をお願いしたい。

2 水源地域交流の里づくり計画（案）について

(1) 県民意見募集の概要

平成27年12月18日から平成28年1月18日まで実施した県民意見募集の結果の概要について事務局から説明を行った。

(宮林委員長)

今回行われたパブコメでは、意見者数は少ないが、内容のあるコメントがたくさんあり、計画に反映できる良い内容の提案をいただいたと思う。

今後はこのパブコメの意見について、3月下旬を目途に事務局で回答する予定とのこと。

何か意見はあるか。 → (意見なし)

(2) 計画（案）の概要

事務局から素案から変更した点を中心に説明を行った。

(宮林委員長)

前回の素案と比較すると、「地方創生」に関連する内容が入っている。県議会等でも「神奈川県におけるこの地域の位置づけを明確にして、計画を推進していく必要がある」という力添えをいただいている。

この「案」について、皆様から意見をいただきたい。

(鷺尾委員)

始めの案から比較すると、スッと読めるようになってきた。

パブコメの意見を見ると、非常に真面目なものが多い。他の案件と比較して、真摯な意見が多かったと、事務局は感じているか。

(田邊水政室長)

具体的に他の計画を見たわけではないが、非常に真剣で前向きな意見をいただいたと事務局の方でも感じている。

(鷺尾委員)

ざっと見た感じだと、現実に水源地域で活動されている方の意見が多いと思うのだが、事務局でもそのように感じているか。

(田邊水政室長)

そう考えている。都市地域住民からもっと多くの意見をいただければと考えていたが、水源地域に住んでいる方や、水源地域で活動している方々の意見、中でも水源環境保全や森林保全の活動に携わっている方から意見を多くいただいたと感じている。

(岩澤委員)

今回、この意見を読んで、初めて知るような内容もあり、非常にいいパブコメになったと感じている。

(佐藤委員)

私は3つの地域の観光振興計画をとりまとめている。また、相模原市観光振興計画の委員も務めている立場で感じるのが、この計画は大変丁寧に我々や県民の皆さんの意見を汲み取って、それから、至らない点が率直に書かれていて、

大変な努力の跡が見受けられる。

そこで、計画（案）を読んで感じたことを何点か申し上げたい。

まず、（案）19ページの「交流の里」とは何であるかについて、現計画と比較して「主な交流拠点、連携施設等」が加わり、「交流の里」が分かりやすくなった。

次に22ページの「『里の案内人活動』の充実」であるが、「コーディネート機能」が入っていることが重要である。ただ文言が入ったというだけでは意味がないので実現に向け検討を進めて欲しい。

次に21ページに「交流イベントの開催にあたっては、やまなみ五湖や交流の里の名称等を冠する」とあるが、これは本当に実施して欲しい。

以前も意見があったが、単にイベントを開催するだけでは活性化につながるか疑問である。「交流の里」の名称を冠することによって、事業の目的が明確になると感じる。

次に26ページの「水源地ツーリズムの充実」について、現行計画とは違い、「着地型・体験型」というのがはっきりと表記されている。「小規模だからこそ」ということが明記されており、この表現は非常に我々に響く。

これまで何度か話したが、里山体験ツアーは、私ども藤野観光協会が一番やりたいことであるし、水源地域の活性化、水源地域の理解を深める肝になるツアーだと考える。

ただ、これは都市地域住民に対しての視点であり、ツアーを受け入れる水源地域側からの視点で大切なのは、水源地域が元気になることである。実際にツアーをやってみると、地元のお年寄り達は若い人を受け入れることにより、元気が出てくる。

神奈川県が進めている「未病」の取組みに関してだが、藤野地域は1人当たり医療費が少ない。病院がないということもあるが、病院に行かないで元気になっている面もある。

このツアーは都市地域住民に色々知ってもらうだけではなく、水源地域が元気になるという面も重要であると考えている。

ドイツでは、医療費削減という観点から、健康保険の基金を病気予防のためにも使っていると聞く。例えば森に散歩道を整備するなどである。このツアーもそのような観点から見ていきたい。

次に28ページの「自治体間交流事業」について28年度の実施内容調査が先日きたが、藤野では2回実施するよう要請があった。

何回も申し上げているが、水源地域では採算がとれるツアーを組むことができない。そのため、少し補助を出していただけると、いいプランを作ることができ、講師に十分な謝礼を払うことができる。

一点、27ページの「山里」という言い方が気になる。これは、山の中にある「人の里」のことだと思う。私達は「里山」と言っている。「里山」は、人が住んでいる集落近くにあって、人の生活が結びついている山のことだと思う。「山里」はしっくりこない。

(宮林委員長)

27ページの「山里」か「里山」かという議論がある。この委員会でどうするかを決めればよいと思う。

「里山」というのは一般的な文化、日本の持っている農耕と山の使い方の文化であって、これは地域的な特徴がある。事務局に聞きたいが、この委員会で「山里」を「里山」に変えることになった場合、実際に変えられるのか。

(水政室・林グループリーダー)

実際には「里山」という名称の方が良く使われています。それをあえて「山里」とした理由としては、「里山」というと、例えば横浜であっても、農耕が残っている地域に山があったらそこはもう「里山」ですし、「里山」を所管している農地保全課も、丹沢や陣馬など水源地域の山からは離れた平野であっても「里山」としていろいろと保全をしているということがあります。

県の農地保全課とも相談をして、「里山」でも間違いはないのですが、この水源地域交流の里は、市町村によりますが、9割以上が山林というエリアもあり、森や木の活用といったこともパブリックコメントで多くの意見がでていたので、ライフとしては、山に着目したライフをアピールしていったほうが特徴が出るのではないかと考えて、「山里」ということにしております。

(宮林委員長)

「山里」という言葉を使うことによって、地域の人達が蔑視される、ということがあればまずいと思うが、私は、山々の自然に恵まれた場所で、奥地の中でやっている文化という意味で使うということで、「里山」とは区別しているのではないかと理解することができる。すなわち、一般の「里山」とは位置づけを少し変えていると捉えて良いのではないかと思う。

やまなみイコール「里山」、ではなくて、やまなみイコール「山里」というふうに、むしろ特徴を出したほうがいいのではないかと思う。この点に関しては、皆さんから意見をもらいたい。鷺尾委員はどうか。

(鷺尾委員)

今の説明を聞くと、「山里」でもいい響きはあるなという感じがしてきた。

今、代わりになる言葉はないかなと考えていたのだが、なんとなく使っているのではなくて、きちんと説明ができるのであれば「山里」でもよいのではないか。水源地域にある、まずは山を見た上で、そこでの暮らしという意味の里、「山里」というふうに、きちんと説明ができるのであれば、この言葉でいいのかなという気はする。

実際には水源地に居られる皆様のご意見を聞いたほうがいいのかと思う。

(宮林委員長)

そのとおりだと思う。富山委員はどうか。

(富山委員)

言葉というのは、響きと中身の問題があると思うが、中身をどうかと聞かれば、私はどちらでもそう大きく違いはないなという感じがしている。確かに、一般的には今まで「里山」と言っているが、新たに意味づけをしながら、さきほど示したような内容で「山里」でもいいのかと思う。どちらかでないとダメだ、というようなことではないと思う。

(宮林委員長)

岩澤委員はどうか。

(岩澤委員)

私も富山委員と同じような意見だが、ただ、あえて言うと、この資料を一般の県民の方が見た時に、今、あえて使っている「山里」という言葉を、説明文が無い状態で使うと、言葉を捉える側としてはどうなのかな、という疑問を持ってしまう。この言葉をあえて使うのであれば、説明文を付け加えるというのもひとつの方法かなと思う。そうすればもっとよく伝わるのではないか。

(宮林委員長)

なるほど、ありがとうございます。説明を入れるということですね。和田委員はどうか。

(和田委員)

私は暮らしという視点から見て、「山里ライフ」というひとつの言葉売り出すというか、そういう意味では、よろしいかなと思う。やはり山というのが我々の資源だと思う。「山里」という言葉に水源地の住民が拒絶感を持つのであれば問題だと思うが、そうでないならば、「山里」という言葉を使って、逆

に売り出していったらどうかという感じは持っている。

(宮林委員長)

安川委員はどうか。

(安川委員)

私の知っている範囲では、「里山」という言葉は新しい言葉であり、昔は「山里」と言っていた。「山里」の場合には、さきほど委員長が少し言われたが、少し閉鎖的なイメージがある。ところが、20年ほど前から、ある1冊の本で「里山」という言葉が広まり、自然と一緒に生活している地域を、「山里」ではおかしいから、「里山」と表現した。その響きが非常に良かったためか、今はかなり使われている。そのあたりのことを考えると、ここで、「山里」とあえて言ったことに対して、説明があれば正しい意味合いで受け取れる、という気がする。

(宮林委員長)

水野委員はどうか。

(水野委員)

私たちの城山地域も「里山」ということで、県の指定も受けており、やはり、「里山」の方がしっくりくる。「山里文化」というと、城山地区にある「里山」とはちょっと違うものというイメージを持つ。「山里文化」のほうが、昔から受け継がれた生活と結びついたものというイメージがある。「里山」というのは、安川委員が言われたように新しい言葉で、都市近郊に残る自然を活用して魅力を発信する観光に使うようなイメージがある。この計画の対象となる地域はそれとはまた少し違うのかなと。改めて「山里ライフ」と言われると、今まではちょっと気づけなかったのだが……。そんな感じを受ける。

(宮林委員長)

甘利委員はどうか。

(甘利委員)

「山里」、「里山」ということについて考えたことも無かった。相模湖の中では「山里」、「里山」という言葉は普段使っていない。そういう名称の団体もない。藤野には里山くらぶ、津久井には安川委員のやっている里山津久井をまもる会があるが、どちらがいいというのは、私も判断がつかない。

(宮林委員長)

府川委員はどうか。

(府川委員)

農地保全課にも照会されたという事だが、農地保全サイドだと「里山」という言葉で使っていると思う。新たな表現ということで、これから事業展開していく中で、区別して「山里」という言葉にしてもいいのかなという感じはしている。

(宮林委員長)

大体、皆さんの意見では、きちんと説明されれば、「山里」でいいのではないかというような意見でした。

江戸時代の小説で、「山あい、やまやまあい、ある里の村々」というのが出てくる。それで、「山里」というふうには民学は使ってきたが、四手井綱英先生が「里山」と変えて使った後、「里山」が一般的に広がってきた。

そうした中で、このやまなみ五湖計画ではあえて「山里文化」とすれば、まさに、山との関わりのある暮らしであるわけだから、「里山」との違いがでる。薪とか、炭とか、そういうものを優先して暮らしてきた地域で、そういう所に修験の道場があったりするのが「山里文化」である。「里山」というのは、もう少し平地の方の感じを受けるが、そこには修験道が入ってこない。そうしたものは、「里山」のもっと奥になる。

山を分類すると、奥のほうは「峯」や「岳」、その手前は「奥山」、その手前が「里」である。「山里」というのはこれらの概念が全て入る。「里山」というのは、「峯」と「奥山」が入らない。そういう意味があるので、注書きをつけて、「山里文化」で売り出したらどうだろうか。

(田邊水政室長)

私どもも、水源地域というのは、「山」という部分を取り込んでいかないといけないのかなと思い、あえて「山里」という言葉を使わせていただいた。

ご意見をいただいて、確かにそのとおりだと思うので、説明を加える形で整理したいと思います。

(宮林委員長)

では(案)では「山里」という言葉を使っていくということでよいと思う。そこに疑問を呈してくれたのが佐藤委員だがどうか。

(佐藤委員)

「山里」というと、都会から切り離されたすごく閉鎖的なイメージがあった。水野委員がおっしゃったように、城山では「山里」というイメージはできない。あれはまさに「里山」だと思う。説明があったように、横浜にも「里山」がある、でも、「山里」はない、と言われれば、ある意味納得できるが、ぱっと言葉だけ見た時には、ニュアンスとしては差別的な感じを少し受けてしまう。でもそれは説明次第であって、皆さんがあえて「山里」に着目しようとするのであれば、それで異論はない。

(宮林委員長)

わかりました。確かにそうだと思う。もう一つ補足すると、水源地を抱えているというのが「山里」だと思う。河川の源流を持っているというのは「山里」、そうなってくると「山里」というのが非常にいいのではないかな。

(田邊水政室長)

一点、先ほどの佐藤委員の発言で、水源地ツーリズムなどを行うことによって、「地域の人達が元気になる」という視点が重要だというお話をいただいた。計画案には地域の人達に誇りを持ってもらうとか、そういった記載はあるのだが、「地域の人達が元気になる」という視点が無い。この言葉は聞いていて非常に良いと思ったので、今後、検討してできるだけ反映したい。

(佐藤委員)

藤野の地に居て、高齢者が増える中で、皆がどういう生き方をしているかということ、これは大事な視点だと思う。

(宮林委員長)

他にご意見はあるか。

(安川委員)

計画(案) p24 の「水源地域内の施設の連携による交流の促進」についてだが、前回の検討会の後、ダムの見学会を実施した。これを企画したときに、一番困ったのは、ダム施設は土日休みのところが多いので、企画に組み込むのが難しいということ。

ダムによって、職員の説明もいいし、受入れもしてくれるところもある。一方、前向きに対応してくれない施設もある。以前、城山ダムを見学した人が

「非常にいい」と言っていたので、調整してみたが、土日が休みということで実施できなかった。その辺りを県の方で調整していただけるとありがたい。

(宮林委員長)

将来的には「里の案内人」の中にダム関係者も入れれば、否応なしにダム施設も巻き込んでいくことになる。

(甘利委員)

相模湖ではここ何年か、7月の海の日に「相模湖ダム祭」を行っている。ダム湖の案内や、湖の水源環境の説明、発電所の見学などを行っている。県企業庁に休みの日の開放をお願いしているが、快く引き受けてくれる状況にある。

(宮林委員長)

そのような事実もあるので、ダム関係者も「里の案内人」に入っていただくのがいいと思う。他にご意見はどうか。

(富山委員)

地域活性化について、計画(案)にまとめられている内容で、地域の実態と特色に応じて進めれば、それなりの活性化につながると思うが、私が今住んでいるところは、標高が300~400mぐらいのところ、交通の便がなく、就業の場所もないので、就業年齢になれば、山を下りて職を求める。私は子どもが6人いるが、家から通う子はいない。絶対通えないというわけではないが、駅まで歩いて1時間半かかりバスもない。

そうした中で、地域の活性化を図ろうと20~30年取り組んできた。地元では地域の活性化をあきらめている人も多いが、少数の真剣に考えている人にとっては、「経済林としての山」をどうつくっていくかが今、大きな肝となっている。もっと平たく言えば、「お金になる山」にしないと駄目だということである。

今は就業の場が地域に無く、数年前に小学校もなくなってしまい、子ども達も出て行ってしまった。その問題をどうやってこの五湖計画で解決するのかと考えていた。

この計画と県の林業政策の関連について、今後の課題なのか、全く別の問題なのか、行政の役割の問題があるが、私たちの急務は、「きちんとお金になる山」「生活していける山」をどうつくっていくのかということであり、それが水源林の保全にとって非常に大きな要素を占める。いずれそれを担う人間がいなくなれば、この計画でどんなことを言っても何もできない。

では、地域は何もやっていないかというところ、そうではなくて価値のなくなった山の再生、山づくりに取り組んでいる。今ある木を伐採して、広葉樹林を植えれば、シイタケのほだ木づくりの材料になる。そういうところに仕事の出場が出てくるのかなと思い10年計画で始めた。でも、それが10年持つかかわからない状況だ。担い手の半数近くが60代で、10年経つと、70～80代になり、働き手がいなくなり、外から人をいれる必要がある。外から人に来てもらうには、そこに魅力がなければいけない。

5年程度ではこの状況は変わらないと思うので、次の計画の策定時にそこを考えてほしい。

(宮林委員長)

現場の産業との関わりが非常に重要で、このやまなみ五湖地域で主となる産業は間違いなく林業である。しかし、林業は木材価格の下落の問題でなかなか上手くいかない。そこに収益を出すにはどうすればいいのか、林業サイドで考えていることであろう。やまなみ五湖計画と県の林業計画は重なる部分があるから、これは県の方で調整してもらって、総合的な位置づけを地域の中に落としってもらう。このようなすり合わせをやってもらうと、計画が生きてくると思うが、現在検討している計画に全て反映することは難しいと思われるので、今後の課題として検討を進めてはどうか。

それから、やまなみグッズについて、鷲尾先生から細かくやらないで地域産品はみんなやまなみグッズに含めてもいいのではという意見があった。こういうことも今後議論して、できるだけ、地域のものが地域の中で活用され、順次外に出ていって使われるような仕組みをつくるのが大事だと思う。

(田邊水政室長)

今、富山委員がおっしゃったことは非常に重要な視点で、この計画は「交流」ということをベースにおいて、地域資源を活用していくということで、地域の生業にも反映できればいいのかなと考えている。

また、県の方では、水源環境税という、特別な税をいただきながら、水源環境保全・再生施策を行っている。この施策とも連携しながら事業を進めていく。この計画の中でできることはしっかりとやっていく。

また、委員長の話にもあったが、地域の木材を使ったやまなみグッズ、まさに今、間伐材を使ったグッズのご提案をいただいているので、そういった部分でも林業部門と連携しながらしっかりとやっていきたい。

(府川委員)

山北町は川崎市と交流事業をやっている、富山委員も所属している、NPO 法人「共和のもり」というのが事業に参加している。川崎市に木材利用促進フォーラムというのができたが、そこに山北町長がアドバイザーとして位置づけられ、「共和のもり」メンバーも部会に参加することになった。ますます地域材を活用できるということで、p16の「政令指定都市等との協働」に位置づけられ、明るい兆しが見えるのかなと感じている。

(宮林委員長)

現在、多摩川懇談会などで多摩川上流という関係で国産材の利用を進めようとしている。川崎市が動けば横浜市も動くので、頑張っていきましょう。

(宮林委員長)

それでは、この計画を今後どう進めていくか議論をしていきたい。

(甘利委員)

計画(案)p37に「実施体制」の図があり、一番トップに「水源地域交流の里づくり推進協議会」があって、その下部に各地区の推進協議会があって、その中で今まで事業が進められてきたと思うが、私も実態がよく分からないので、実際にやっていく場合はどういう形で進めていくのか、その辺りの話を聞かせて欲しい。

(水政室・林グループリーダー)

「水源地域交流の里づくり推進協議会」は、神奈川県と水源地域の相模原市、山北町、愛川町、清川村が負担金を出して協議会活動をしています。また、負担金はいただいているが、構成員として国や農協、森林組合、商工会、観光協会などの関係者が参画して、協議しながら、活性化事業や普及啓発事業などを行うというもので、この計画の施策1～10については、協議会の事業として実施していくものが中心です。

p37の水源地域交流の里づくり推進協議会の下にある「水源地域交流の里づくり地区推進協議会」は、やまなみ五湖は地理的に離れているので、県央(宮ヶ瀬湖)、県北(相模湖、津久井湖、奥相模湖)、足柄上(丹沢湖)に地区協議会が分かれていて、イベントなどの支援は地区推進協議会を通じて行っている。

また、協議会について、相模原市の合併や、県の組織再編により県央、県北エリアが同一所属になったことにより、推進協議会のあり方についても検討を

しなければならないと考えている。その地区の市町村の皆さんと話し合いをしながら、組織運営のために手間がかからないようにし、実効性のある事業ができる仕組みに変えていきたいと考えている。このことについては、事務的なレベルで進めてまいります。

(宮林委員長)

当初は、協議会において色々な団体が情報交換をしていくことが大事であると考えていたが、色々な協議会などを拝見すると、実際年に1回の会議で終わることが多いと思う。それではうまく機能しないので、今度は協議会の中にくつつかの部会のような組織をつくるのがいいと思う。

特に「里の案内人」部会等は絶対に必要だと思う。これが核になる。いくつかの部会を協議会の中に作って、そこで活動したことを協議会で報告すると、中身がチェックできると思う。

(甘利委員)

確かに今までだと、推進協議会総会は年に1回開催される。副知事がトップで、相模原市は副市長が入っている、重たい組織であるので、機動力がないと思う。総会が開催されたのち、それを受けて地区推進協議会が開催される。地区推進協議会も年に1～2回程度の開催で、そうした中では、実際の事業が機動的にやっていけるかどうか疑問である。

(宮林委員長)

今回、動かすのは「里の案内人」である。これを軸にして、基本的な部会をつくっていく必要がある。そうしないと、なかなか具体的に進まないと思う。

(鷺尾委員)

計画(案) p20 の「小柱」をもとに構成事業が掲げられているが、これらの事業は、すべて相互に連携していかなければならないと思う。委員長が言ったように、「里の案内人」が全ての事業に渡って核となっていくと思う。

特に、「水源地ツーリズム」がこれからまた多様化していこうとするときに、何が必要かと考えると、「里の案内人」の暮らしの中であるものを、お互いの話の中で「これ行けるぞ」「これやろうよ」というような声が上がってくる仕組みづくりが非常に大切であると思う。それが他の事業の中でも関わってくると思う。

先ほど、研修会を予定しているという話もあったが、名前は研修会で構わないが、中身は、それぞれの報告の中で、連携するものがないか率直に自分たち

がしていることを話しあうものにして欲しい。

また、個別の話になるが、「水源地」というと子どもへの教育ということになってしまうが、ダムなどは大人が興味を持つので、そういう視点で「水源地ツーリズム」を実施していただきたい。

また、ダムはなかなか公開しにくいということであるが、例えば黒部ダムの裏側を見るツアーは、関西電力主催の見学会として、抽選で実施されているが、これに加えて地元の観光協会などがモニターツアーとして実施したり、旅行会社が特別にツアーの行程に組み込むなど、柔軟に運用されていて人気だと聞いている。

黒部ダムは関西地方に電力を供給しており、それに対する地元への恩返しとして始まったものだと思うが、ダム関係者にとっては公開しにくい部分もあったと思う。そこは地元の人が、関電を説得したと思う。

だから、この場にダム関係者が委員として入ってくれば、この計画案の展開も変わってくると思うので、企業の方に委員に入ってもらいたいと思う。

何故、この話題を振ったかという、私は神奈川県民で、水源地域にはよく行くが、どこの森か忘れたが、「この森は、企業のボランティアにより整備された」という表示を見たことがあった。

今、それぞれの企業が社会貢献として、森の基金へのプログラムを実施していると思うので、フィットするところがあれば、お金をいただくことも検討してはどうか。佐藤委員もおっしゃったように、お金の補助は非常にありがたいので、県でできない部分については、そうしたことに興味がある民間企業も巻き込んで取組みを進めていただけたらと思う。

(田邊水政室長)

来年度の事業内容をこれから考えていかなければならないが、「里の案内人」については、本当に力を入れてこの5年間やっていかなければならないと考えている。どういう場を設けて検討するのかは、これから検討するが、いろんな方、場合によっては企業の方にも入っていただきたいと思う。

それから、ダムについては地域資源になるし、私どもが管理している相模湖交流センターでは、2年に1回「ダムマニア展」をやっていて、これがとても盛況で、全国から人が集まる。ダムカードも人気がある。

ただ、ダムの管理者は、自分たちは観光でダムを運用している訳ではないという意識があるので、鷲尾委員が言ったように、ダム事業者を巻き込んでいくしかないと思う。その辺りはまたアドバイスをいただきながら進めていきたい。

(岩澤委員)

地域の人材、「里の案内人」を増やしていく、という話を聞きながら、あの人に声をかけよう、この人に声をかけよう、というイメージがわいてきた。地域の人を巻き込んでいく役目が我々にもあることを感じた。

先ほどのダムマニア展もそうだが、宮ヶ瀬ダムにも色々な人が来て、ダムカードをたくさん持っていく。宮ヶ瀬で今、新しくできたダムカレーが非常に人気で、私たちが知らないところで、ダムが流行りになっているが、清川村の人はダムカレーを食べたことがない人が多いと思う。食べているのは外の方である。

この委員会の中で、地域の外だけでなく、地域内にも発信していくことをずっと申し上げてきたこともあるので、外に目を向けるだけではなく、なるべく地域の人を巻き込んで色々な形で動いていきたい。

(宮林委員長)

このようにすれば動きますね。ダムカレーの肉は鹿ですか。

(岩澤委員)

いいえ、ソーセージです。

(宮林委員長)

鹿にしてもらいたい。やまなみ地域には鹿はいっぱいいるのではないか。ジビエが進むと良い。

(富山委員)

そうすると、解体施設の問題が出てくる。神奈川県は後ろ向きである。最近、国が地方創生の関係で動き出しているので、今、かなりアタックしている。

(宮林委員長)

廃校などの給食室の厨房を利用すると、あまりお金がかからない。

(富山委員)

町の協力を得て、旧小学校施設に加工場が完成した。

(府川委員)

まだ、完成していない。開設時期については、2市8町と研究中である。

(富山委員)

行政と現場のずれがある。現場では、資源の問題から、ただ捕って埋めるというのは違うだろうと知っている。農協を通してアピールしている。是非後押しして欲しいし、そういう視点から水源地保全の取組みを行って欲しい。

(宮林委員長)

鹿は、生態系ピラミッドでいうと中間になるのだが、これを食っている狼が絶滅してしまったため、鹿は増える一方である。狼の役割を担えるのは人間しかいない。その狼を絶滅させたのは人間であるので、きちんと頭数管理をして、捕獲を行い、それを捨てないで、食べるまでしないとイケないと思う。

(甘利委員)

ダムカレーの話があったが、相模湖交流センターにもダムカレーがある。障害者が働いている店を出している。山をつくって、片側がカレーである。

地域の皆さん全てが知っているというわけではないが、地域の方々が相模湖交流センターを活用するときは、このお店を利用しているので、ある程度の人はダムカレーを知っている。

(宮林委員長)

このように意見をどんどん出し合う場所を作るのが大切ではないか。「里の案内人」の方たちの集まり、そこからスタートするのがベターであると思う。そうすれば色々なアイデアが出てくるし、それを実現していく方向を皆で考えていくことが可能となるのではないか。

(水野委員)

進行管理については、これまでだと、実施事業の参加人数などが指標とされているが、大きな目標である「水源地域の理解促進」がこの計画において進んでいるかどうかわかりづらい。例えば、アンケートなどでそのあたりがわかれば、この計画の実効性が確保されるので、そういう仕組みがあればよいと思う。

それから、計画(案) p26 の「着地型・体験型ツーリズム」については、是非これを推進してもらいたい。推進していくうえで力になるのは、「里の案内人」であり、そこに力を入れて、5年間の中でやって欲しい。

(宮林委員長)

理解度の評価ができる評価手法を考えていく必要がある。

(安川委員)

やはり、「里の案内人」のあり方が議論になったが、これは本当に大きな今後の課題だと思う。人数を増やすのもいいが、それをコーディネートする組織をどうしていくかが大きな問題だと思う。

津久井の場合だと、最近では外から入ってきている方がいる。その方々も、津久井自体をよく分かっていない。

私は公民館事業で、各地域を記録する事業に写真の分野で参加しているが、そのときに必ず地域の人を1人連れてきている。

そうすると、地域の方は特段何かの専門家というわけではないのだが、その場で写真撮影をしながら話をしていると、何げないことに外から入ってきた人達は興味を示す。

なので、都市部の人なら、なおさら興味を持ってくれるのかなと感じる。

あと、ボランティアについてだが、ボランティアというのは、実施方法によっては、タダで働かせるのが目的のようなものもある。それが目的であるならば、全く地元の活性化にならないし、むしろ負の活性化になってしまうのではないか。

(宮林委員長)

そういう方達について、ボランティアではなくて、手間賃程度でも収入が得られればいいと思う。

(鷲尾委員)

ボランティアではなくて、当事者になることが大切だと思う。運営者になるということ。ここにいる「里の案内人」の皆さんは、ボランティアという感覚はないと思う。当事者であり、運営者なのだと思う。

使われるのではなく、自ら動く人になると、その人達は無償のボランティアではなくて当事者になる。

(宮林委員長)

他にどうでしょうか。

(和田委員)

今回、着地型・体験型ツーリズムを位置づけてもらっているが、愛川町は一般的なツアーで人を呼べる場所ではないと思っているので、特に着地型・体験型のツアーには力を入れなければいけないと思っている。

今、具体化はできていないが、今後、県と連携して、県からお力添えをいた

だきたい。

(佐藤委員)

イベントを実施する際はやまなみの冠をして、事業の意味合いを説明することが必要だと言ったが、これは色々なツアーや上下流域自治体間交流事業でも常に意識して欲しい。水源地の活性化や水源地域の理解促進のために、この事業をやっているんだということで、理解を深めることにつながると思う。

それとここで計画を作って今後は実行していく訳だが、必ずお金が絡んでくる。この計画に対してはどんな予算がつくのかというのを知りたい。

「里の案内人」の件だが、計画(案)p15～16の四つの重点施策の中で、四つ目の「政令指定都市等との協働」を除く三つの重要施策「里の案内人」「着地型・体験型水源地ツーリズム」「体験学習」は、いずれも主体が「里の案内人」と考えられる。

しかしながら実態は、この委員会での議論と藤野での経験を踏まえると、現在の「里の案内人」は全く機能していない。そういう実態の中から、この重要施策を牽引していく「里の案内人」をつくり、コーディネート組織をつくっていくのは、そう簡単ではないと思う。

藤野の話ばかりで恐縮だが、今、「里の案内人」をやっている方の他に「里の案内人」の候補になれる人材はいっぱいいる。色々なツアーの案内をしてくれる人、解説をしてくれる人、それから藤野里山体験ツアーの受入家庭、今10軒になったが、その受入れ家庭の人はまさに案内人だと思う。

神奈川ではなく申し訳ないが、国立市の放課後居場所づくりをしているNPO法人が4月1日に子ども20人、付き添いの人10人、30人で里山体験ツアーに来る。それを受け入れる家庭は、里山での色々な体験を用意して、ツアー客に話をするというのをやる。本当に案内人である。そういう受入家庭が「里の案内人」であって、それをまとめて、組織にするというのは、それぞれ地域によって違うし、それは相当本腰を入れてやらなければ、いまゼロの状態から100の状態にはそう簡単にはならないと私は思う。

それを実現するには、検討委員会か何かを立ち上げて、具体的にこうやろうと詰めていかないと、机上の空論に終わってしまう。

(田邊水政室長)

来年度の予算については、これから議会で議論するので、まだ申し上げられませんが、今年度の予算については、この施策の1～10に位置づけている事業については、推進協議会が実施主体ということになります。

推進協議会の予算については、市町村の負担金を含めて、1,000万円弱とい

うのが、27年度の実績です。各市町村から10万円ずつ負担をいただきます。相模原市については、旧4町分ということで、40万円負担をいただいています。その同額として、県で70万円負担、残りは県が事業費として約800万円負担をしています。

28年度以降、計画が新しくなるので、私達事務局としては、今年度より何とか増やせるように努力しているところであり、予算が決まったら皆さんに報告します。

予算に関して、推進協議会としてやっていく事業は施策1~10までであるが、計画（案）の最後のところに地方創生の取組みとして、マグカル取組みや地域ごとの取組みについて追加で書いています。この部分については、推進協議会だけではなく、県全体として、国の動きも合わせて、地方創生の動きの中で、水源地域でも色々やっていくつもりです。

（宮林委員長）

おそらくこれから進めていく上で、早急に「里の案内人」の皆さんに集まってもらえることになると思う。それで、この計画の中身を説明して、具体的に「里の案内人」の役割は何か、これを明確に理解してもらう。そうすると今後、「里の案内人」は何をしたらいいのかが明確になってくる。

また、どこにどういう風に「里の案内人」達がいるのか、いつできるか、どんな体験ができるか、見所は何かというデータを整理して、発信することが必要といえる。

それから、内部的には、中身を充実していかないといけない。先ほど鷲尾先生がおっしゃったように「こんなことができますよ」「こういうのもありますよ」ということをどんどん提案してもらって、中身を充実させる。そうすると「里の案内人」が具体的に見えてくる。さらには、別の地域で「里の案内人」の活動をどのようにやっているかを学ぶ研修を行う、というような形で、それを事業家してもらおうといいかなと思う。具体的なことは協議会において議論して欲しい。

当面はそんなところからスタートと思うので、県にはその段階まで引っ張ってもらえる必要がある。ただし、あまり県が主導者として世話を焼きすぎると地元主体で動けなくなるので、なるべく地元で議論や調整ができればいいと思う。

（佐藤委員）

地方創生について質問したい。やまなみグッズの関連だが、藤野観光協会では、交付金を得て、「かながわ製品の消費拡大事業」を行っている。私のところも1月からやっているのだが、売上は1.5倍ぐらいになっている。「かなが

わ屋」については通常の3倍ぐらいの売上になっていると聞いている。やまなみグッズは藤野観光協会でも一部扱っているが、やまなみグッズ全体でこの消費拡大事業でかなり売れているという状況はあるのか。

(水政室・林グループリーダー)

やまなみグッズは認定させていただいているのですが、その販売の報告は全部はいただいていません。販売方法も、地元だけで売っている場合と、広く卸して売っている場合と、それぞれですので、やまなみグッズの中でも藤野観光協会で扱っていらっしゃるように、かながわ屋で扱っているものもありますので、そういったものは、恩恵を受けて売上が伸びているものもあるという話は聞いております。

(宮林委員長)

ラベリングすればいいのではないか。そのラベルを数えれば、売った数がわかる。難しいかな。

(佐藤委員)

できると思う。でも、言いたいことは、そういう機会があったら捉えてグッズを売り出していく、そういう取組みが大事ではないかということだ。

(宮林委員長)

だいたい議論は出尽くしたと思うが、具体的に実施するには色々な仕組みをさらに検討する必要がある。「里の案内人」に集まってもらうことからスタートして、本日の委員会でも色々なアイデアが出たので、それを具体化することを、さらに協議会の中で明確に位置づけてもらう。ここまで県にお願いしたいと思う。

(宮林委員長)

案についていくつか修正するところがあるが、私に一任させていただいてよろしいか。

(一同異議なし)

では、最後に皆さんから一言感想をいただきたいと思う。

(和田委員)

商工観光課長をやって2年目だが、特にこの検討会に参加して具体的に私に何ができるか、考えさせてもらった。委員長はじめ鷺尾先生など色々お世話になりました。

(岩澤委員)

こういう場に私の声を反映させていただいて本当にありがたいと思う反面、すごい重責を担ったというのが最後の感想です。「里の案内人」としては何もやっていないというところから、実際にこれから先、「里の案内人」として活動するという道筋ができたというのが、この委員会でうれしかったことです。

清川村をこれからどうやって皆さんに知っていただけたらいいのか、また、自分がこの地域を知るきっかけになったと思う。参加させていただき、ありがとうございました。

(富山委員)

「里の案内人」を何年か前に受けてやっているが、実際には何をどうすればいいのかははっきり分からないままだった。検討委員会を通して少し明確になって、さっきのように、中身と位置づけの問題が出てくる、ある意味で展望が一つ開けるのかなというのが一点。

もう一つは、やはり地域の人間として、地域がどう取り組むかというのが最終的には大切かなと思う。地域には色々特徴があるから、自分が住んでいる地域の特殊性をどうつかみながら、どう活かしていくのか、それが非常に大事ななと感じた。

自分一人ではなく、地域の中に仲間を見つけながらやっていく。また、他の地域の良い事業を学ぶ場が出来てくれば、学んだことを地域に戻していくことができる。原点はやはりそうしたことなのかなと強く感じ非常に勉強になった。

(佐藤委員)

今日、藤野を出るときはまだ道の北側は雪が積もっていた。畑にもまだ雪が残っていたが、こちらに来たら、雪の跡もないし、やっぱり山里ですか、地域によって違うなと思った。

検討委員会で色々な意見交換ができたのは私としてはありがたかったと思う。

繰り返しになるが、藤野里山体験ツアーは、藤野の売りだと強く思うので、市の方に働きかけながら、藤野だけでなく、津久井全域に広がるといい思っていて、市との協働事業の形でできないかなと模索している。

同時に、今まで体験ツアーに来ているのは東京の人ばかりなので、横浜、厚

木などの県内からも参加して欲しいし、そういう広報などで支援をいただけるとありがたい。

やはり藤野の思い出というものは、最終的にはライフスタイルだと思う。
3.11以降の「日本の生活はこれでいいのか」という疑問がすごく藤野に響いて、私自身、今、野菜はほぼ自給でき、電気もソーラー発電で金額的にはほぼ自給できている。小さい町だけれど、キラリと光るライフスタイルで何か発信していく、そういう地域になって欲しい、そのために余生を尽くしたい。

引き続きご縁があればよろしくお願ひしたい。

(府川委員)

農林サイドで参加させてもらって、観光面の意見を聞いて勉強になった。県西地域だが、「未病」を推進しているので、これから食文化についてもある程度力を入れながら、アピールしていきたいと思う。

また、「山の日」が今年からあるが、今、玄倉の「ユーシンプルー」が巷で話題になっている。どうしてもダム関係で県企業庁との協力も得たいので、是非そこは県の方のバックアップをお願いしたい。

色々な事業があるが、是非、「水源」という冠をつけてやまなみをPRしていきたいと考えている。

(甘利委員)

水野委員とともに、相模原市緑区の四つの地域の代表として出させていた。最初会議に入るときに、同じ行政の立場で、意見を言うのはどうかという感じもしたが、計画の中で感じたことを色々と述べさせていただいた。

交流の里づくり事業を、いかに地域の人達、県民の方々に浸透、広めて、認知していくのか、というところが大変努力のいることだと思うし、大きな課題かなと思っているので、引き続き県と協力しながらやっていきたいと思う。まだまだ地域のこと知らないなので、その辺も勉強していきたいと思う。

(水野委員)

昨年の4月に城山まちづくりセンターの所長に就任して、経験がまだ浅い部分があるのだが、今回ちょうどこの改定の時期ということで、計画づくりに携われたのは大変良かったと思っている。普段は津久井や相模湖、藤野地域との情報交換は多いのだが、やまなみ五湖広範に渡って、「里の案内人」の皆さんの話を色々と聞いて大変有意義だったと思う。

また、計画づくりにあたって、県の方も丁寧に検討委員会以外でも意見を交換する場を持っていただき、感謝したいと思う。

(安川委員)

私は「里の案内人」であるが、なかなか全体像が見えにくかった。この検討委員をやらせていただき、その辺りが明確になった。「里の案内人」がこれから大変だなということを実感している。全体が見えたということで頑張っていきたいと思う。

(鷺尾委員)

観光の立場から、できる限りのこととお話しさせていただいた。私自身この会議に出させていただき、大変勉強になった。先ほど申したように、私にとって水源地域は遊びに行くところなので、また、遊び方が違ってくと思う。

また、勤務している大学自体がやまなみ地域と近いところにあるので、また何かお役に立てることがあるかもしれない。

検討委員会では、委員長が非常に上手く皆さんの意見を引き出して、本当にいい会になったと思う。また、事務局の方にも色々丁寧にご説明いただいた。この委員会がいい感じで終われるのは、そのおかげだと思う。

(宮林委員長)

皆さんありがとうございました。大変、いいご意見をいただいた。

私は最初に「里の案内人」をつくった一人として、今、全然機能していないという話を聞いて驚いた。もう15年も関わっていて、何をやってたんだという反省から始まったのだが、ようやくここで中身が見えてきた。

実はこれからが大変だと思う。こういう計画というのは、先ほど佐藤委員も言ったように、出来上がってお蔵入りすることが多くて、それでは面白くない。せっかくここまで来たので、これから一歩ずつ動かしていくのが地域にとって大事で、その場合、地域主体、まさに地域の人達自身が考えていく、そこが重要だと思う。

現在、環境教育をどう進めていくのかという問題があり、また、子ども達にとっては体力の問題、あるいは、創造性の問題、物事をどう考えてどう組み立てていくのか、というところが、日本の若い人達にはできなくなっていると言われている。それはなぜなのかというと、原体験をしていないからだという議論もある。

それからライフについても、都市社会は窮屈でたまらん、そこで都市を出てみたら、山村はえらく住みやすくて心地よいという若者が出てきた。つまり、価値観が大きく変わってきている状況なので、この「やまなみ五湖」ないしは「水源地域」という冠をあらゆるところに出してPRしていただきたい。

そして、この事業計画期の5年間で、県民全てが水源地を理解、あるいは「やまなみ五湖」を認知するくらいのPR活動と実践活動を積み重ねていくことによって、大きな変化が出てくるのではないかと思う。まさに「里の案内人」を明確にすることと、そのPRを全県に向けて、全国に向けてと言っても構わないくらい、あらゆる場面で「やまなみ五湖」を、「山里」を、「源流」を売り出して欲しい。

3 まとめ

(水政室・林グループリーダー)

今後は本日いただいたご意見を踏まえ、(案)を委員長と調整させていただいた後、2月に開催される神奈川県議会常任委員会で報告して、議会での議論の後、知事の決裁を経て、3月に改定計画が決定する、という流れになります。

(田邊水政室長)

委員の皆様には、昨年から4回に渡りご出席していただき、色々と個別にご相談もさせていただき、ありがとうございました。

今日も色々と話が出ましたが、これで今年度中に計画は策定できると思っております。また、この計画を策定することが終わりではなく、策定してからがスタートだと思っています。

今日も貴重なご意見をいただき、心強く思っています。是非、今後とも事業を実施していくにあたって、ご指導、ご意見をいただきたいと思います。今後とも引き続き御協力をよろしく願いいたします。

4回にわたる検討会に参加していただき、ありがとうございました。